

海付きの低湿地における生業形態の変化と 分業について

—浦安のハマとオカー—

秋山 笑子

千葉県立中央博物館 主任上席研究員

本稿の目的は、海付きの低湿地における農業について、歴史民俗学的な意義を考察することにある。農地として劣悪な条件下にある土地において技術の進歩と環境の変化に対応しつつ、分業化することによって生活の維持をはかってきた生業を記述し、その消滅までを通時的視点から考察する。その際、できるだけ数値によって把握できる資料と聞き取り調査によって、検討を進める。

調査地である千葉県浦安市は、1960年代後半以降に埋め立てられ、今では市域の約4分の3が埋立地である。かつて広大な干潟が広がり、豊かな魚介類と海苔養殖に最適な場所だった。漁業中心ではあるが、畑と田が存在し、収穫物のほとんどが自家用だった。

浦安は、明治末から海苔養殖や貝養殖を盛んに行うようになり、昭和初期頃からハス栽培を行うようになる。漁獲高が減少していたために、新たな技術として海苔養殖と貝養殖を導入していったと考えられる。また、ハス栽培は現金収入を計ることができ、これも新たな技術導入といえる。そして、昭和20～30年代に稲作、ハス栽培、魚漁、貝漁、海苔などの生業を組み合わせるために、稲作では日雇とり、ハス栽培ではハス職人や洗いっ子、魚漁では行商、貝漁ではムキミ屋や行商、海苔では運び屋などに分業していった様子が伺える。

次に、浦安在住のN氏の昭和28年、30年、40年の3年分の手帳を分析した。その頃の浦安は、地盤沈下や工業用水取水による塩害、悪水等の公害、交通網の発達による都市化等によって生業構造の変化を余儀なくされていた。このような生業構造が変化する契機は、①各生業の盛衰、②技術の進歩、③個人的な要因、④公害などの環境変化、⑤社会的変化などが挙げられる。浦安は都市に隣接しているために、環境変化と社会的変化がほぼ同時に進み、結果として農業が先に立ちゆかなくなり、その数年後に漁業もできなくなる。こうした変化が、もともと農地として劣悪な条件下にある海付きの低湿地農業に致命的な影響を与えた。

本稿では、従来あまり注目されていなかった海付きの低湿地での農業を中心に、計量的データ等を活用することで、より具体的に生業の形態を明らかにしようとした。結果として、それぞれの業種を大きな規模で行うのではなく、細分化することにより均衡を保っていくことで、農地としては適していない土地での農業は成立し得た。

キーワード：海付きの低湿地、農業、漁業、分業、劣悪な条件、計量的データ、千葉県浦安市

はじめに

1. 浦安の地質と農業

2. 海付きの低湿地における農業

2.1 浦安の農業の概要

2.2 稲作の作業工程における海付きの低湿地での特徴

3. ハスと下肥

3.1 ハスの導入と栽培面積

3.2 地盤沈下とハス栽培

3.3 海付きの低湿地におけるメリットとデ

メリット

4. 浦安の漁業

4.1 明治時代から昭和初期までの漁業

4.2 海苔養殖

4.3 貝養殖

4.4 漁業不振による影響

5. 浦安の生業形態

6. N氏の生業

おわりに

はじめに

現在、東京ディズニーランドがある場所は、かつて大三角と呼ばれた広大な干潟で、豊かな魚介類と海苔養殖に最適な場所だった。その干潟は、1960年代後半以降の造成により埋め立てられ、今では千葉県浦安市域の約4分の3が埋立地である。埋め立て前の浦安は、町の真ん中を流れる境川の北岸に猫実地区、南岸に堀江地区、町の北部にあった船堀川周辺に当代島地区の3地

区によって形成される集落であった。町は江戸川の河口にあたり、漁業の町として発展したが、そこには「小さな畑と田んぼ」も存在していた。

集落は自然堤防沿いに形成され、畑と田は標高0～1メートルの後背湿地に作られた。もともと海だった所に土砂が堆積してできた所であり、東京湾に突き出るような土地柄から、農業では塩分で苦勞することが多かった。その収穫物はほとんどが自家用で市場に出荷されることはなかった

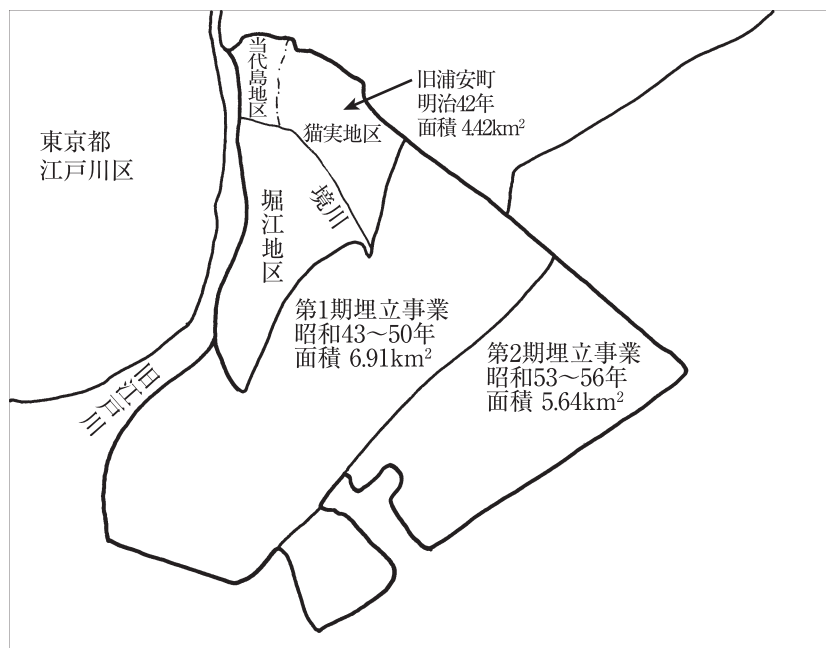


図1 浦安市域の変遷

が、女性たちを中心に農業は行われていた。

本稿の目的は、海付きの低湿地における農業について、歴史民俗学的な意義を考察することにある。農地として劣悪な条件下にある土地において技術の進歩と環境の変化に対応しつつ、分業化することによって生活の維持をはかってきた生業を記述し、その消滅までを通時的視点から考察する。その際、できるだけ数値によって把握できる資料と聞き取り調査によって、検討を進めることとする。海付きの低湿地である浦安をフィールドとし、その生業である農業（稲作、ハス栽培）、漁業（魚漁、海苔養殖）などの実態を明らかにし、浦安在住のN氏の手帳から昭和30～40年代の生業構造の変化について分析する。

ここではまず、これまでの民俗学における生業研究で自然と生業をキーワードとして、日記などの計量的データなどを使った論考を整理する。これは、自然や環境をテーマとした生業研究が新たな潮流となったことによって、現在の環境問題への視座を持つことが可能となったと思われるからである。先行研究を整理することによって、海付きの低湿地の農業を検討することについての意味を改めて考えてきたい。

1980年代後半から1990年代前半にかけて、自然、生態、環境という新たな概念によって括る動きがでてきたとされている（菅 2001: 62）。

一つは野本寛一の「生態民俗学」である。野本は膨大な資料を駆使して、生態学的用語と概念によって「生態民俗学」という分野を提唱して、発展させていった。（野本 1987、1994、1995、1997、1999）

そして、「自然を生きる人々」という語で、生業を対象として海や山や川の自然を使用してきた人々を意識して論を重ねたのは篠原徹だった（篠原 1990、1995、2002、2005）。篠原の調査手法の特色は、聞き取り調査だけではなく観察等によって「地域の民俗知識の束として自然観の全貌を明らかにする」（篠原 1990: 11）ことにあ

る。この手法は、篠原が植物学等を専門とし野生の生物の分類や生態に関する知識や感覚を磨くことによって成立しえた。こうした手法により、聞き取り調査ばかりではなく多様な方法的検証を可能にしたのである。この方法論が、技能やマイナー・サブシステムなどの研究につながっていくこととなった。

また、1980年代中頃から安室知の複合生業論の立場からの研究が進められている。安室は、「複合生業論では、人（または家）を中心にその生計維持方法を明らかにする。従来は個別に論じられてきた生業研究が分析的方向性を持つとするならば、複合生業論は総合化を志向するものであるということが出来る。」（安室 1997: 39）としている。こうした生業論の展開の中で、計量的データ等を用いた資料により生業をより具体的に概念化する手法が求められるようになる。（野本 1997: 11; 小島 2001: 36-37; 菅 2001: 19）

農業日記を分析した論文としては、永島政彦「農業日記にみる畑作農家の生業」（永島 1996）や山本志乃「市稼ぎの生活誌—農家日記にみる定期市出店者の生活戦略」（山本 2010）、秋山笑子「水辺の環境と生活の変容—手賀沼のほとりで農に生きた人：増田実日記から—」（秋山 2010）、安室知「一年の暮らしと複合生業—農家日誌の分析から」（安室 2012）等がある。

また、卯田宗平は漁業と農業を複合的に行う「両テンビン世帯」で生産力を最大限に引き出す方法とし、房総の漁村の一世帯内の農漁業労働配分の年周期・日周期とその生計戦略が考察されている（卯田 2003）。今里悟之は「定置網漁村における複合生業形態の計量分析—昭和初期の丹後半島新井集落を事例として—」で、税務関連データにもとづき、その生計戦略について分析している（今里 2004）。また、浦安については、地理学から西脇保幸「都市化による土地利用の変化」（西脇 未刊行）、「人口増加による土地利用の変化—浦安町地域産業関連表を用いて」（西脇 1975）があり、昭和30～40年代における土地

利用の変化を考察した。

計量分析の是非は、今里悟之と山下裕作が『日本民俗学』で論争しており（山下 2006; 今里 2007、2010）、数値データや文献資料などを通じて、生業をめぐる客観的状況をできるだけ精緻に明らかにした上で、現場の人々の内面に迫るような聞き取りと観察を行うことが、重要になっていくのではないかと山下は述べている。

上記の成果を踏まえて、本論文では聞き取り調査と計量的データや手帳などの資料を活用する手法を取る。

生業は、時間軸や社会状況、または家族や個人的理由等によってそのあり方が変化していく。地域の概略は市町村史や文献資料などによって掴むことができるが、それだけでは変化の大きな流れしか分析することができないのではないだろうか。聞き取り調査を行うことによって、生活の中にある生業に触れることができ、その生活のあり方や考え方やその意義を知ることが可能となる。しかし、聞き取り調査では話者は常に調査時の現在から過去を見ており、そこにはかつての自己を客観視する視点が存在し、現在を肯定した立場からかつての自分を表現することもあり、当時の生の感覚を知ることはかなり難しい。また、時間経過による記憶の中での誤差も出てくることはいなめない。そこで、計量的データや日記、手帳等の資料を活用することで、より具体的に生業の形態を明らかにすることができるのではないか。

本論文では、農地として劣悪な条件下にある海付きの低湿地で、分業化することによって生活の維持をはかる生業を、できるだけ数値によって把握できる資料と聞き取り調査によって検討を進める。まず、1. 浦安の地質と農業では土地と生業の成り立ちを概観し、2. 海付きの低湿地における農業ではデメリットについてまとめ、3. ハスと下肥ではその導入と海付き低湿地でのやり方について述べ、4. 浦安の漁業では東京内湾での漁業と農業の関係についてまとめ、若干長

くなるが浦安での生業の実態を明らかにする。そして、5. 浦安の生業形態で昭和20～30年代に分業化について述べ、6. N氏の生業で浦安在住のN氏の手帳から昭和30～40年代の生業構造の変化について検討する。

調査方法としては、昭和初期から昭和40年代を対象として、聞き取り調査の手法を主として、手帳等の文献資料などで補完して検討を進めることとする¹⁾。聞き取り調査は、平成21年8月～平成24年3月に農業従事者など計28名から行った²⁾。

また、昭和初期以前のデータや聞き取り調査で不明確な部分や年代等については、『浦安町誌』など文献資料で補った。

1. 浦安の地質と農業

【浦安の地形と地質】

浦安は、旧利根川の本流であるふとい川（太日川、太井川、現江戸川）の河口部のデルタ地帯に発達した平坦地であった。台地や丘陵のないこの平坦な土地で、境川兩岸と当代島の北側にある自然堤防は地表面と市域の大部分はシルト質（粒径が砂1/16ミリより小さく粘土1/256ミリより大きい）などの細かい粒子でできた柔らかい地層で覆われており、自然堤防地は砂質である（小室正紀 1992: 117; 財団法人千葉県史料研究財団 1996: 71）。

国土地理院「治水地形分類図（初期整備図）」によると、浦安市域の境川兩岸と市川への旧県道沿いが自然堤防となっている。こうした自然堤防は標高1～2メートル程度の微高地であり、その後ろにできた後背低地は標高0～1メートルである。

自然堤防である境川兩岸と旧県道沿いの微高地の周りに江戸川の土砂がたまって、堀江・猫実・当代島の地域に土地が形作られたと考えられる。

【集落の成立】

江戸時代以前の浦安については資料が極めて少なく、村の成立については明確にわからないが、もともとは海だったところに江戸川の土が

堆積して、人々が住むようになったと思われる。

江戸時代の堀江村、猫実村、当代島村は、下総国行徳領に属した。その後天領となり、行徳領塩浜附村々26カ村として、江戸時代初期には塩を生産していた。しかし、段々と塩浜は減少し、堀江村、猫実村の塩浜は寛永期には荒廃し荒浜になってしまい、その跡は農民の入会利用を禁じた原野（立野）になり、百姓持ちの葭野になったと「塩浜由来書」³⁾にある（市川市史編纂委員1972）。

文政5（1822）年8月に村井嘉陵が猫実に来訪した時の様子を、『江戸近郊道しるべ』「舟堀・宇喜多・猫実」で次のように記している。

猫実村、七八十戸、多くは漁家にして、農も交り居る、辰巳に向ひたる処に、海面を横にして、大神宮みやゐまします⁴⁾

このように、文政5年頃に猫実は7、80戸しかなく、漁家が多いが、そこに農家が混じっていることが記されている。これによりすでに漁業を中心としながら、農業も行う形態ができあがっていたことが確認できる。

その後、庚申堂から用水に沿って田くろ路を行くと新居村（現市川市新井）に着くと書いている。浦安では田と田の間の畦をクロという。つまり、田くろ路とは畦道がそのまま道として使われていることを意味している。こうした表現から庚申様から北に行く道の周りには田が広がっていたと思われる。添付されている地図にも、格子状の田を表現し、土地の周りを囲む堤防に松のような木が描かれている。これは中道なかつちといって、昭和40年代に土地改良事業で道路ができるまで浦安と市川を結ぶ唯一の道路だった。

こうして江戸時代には旧利根川（現江戸川）の河口部に流れてきて堆積した土によって、海面埋め立て前の浦安地域の地形はほぼできあがり、当初の生業は塩浜だったが、文政期以前に漁業と農業を行う生業の形態へと変わっていった。

【集落と堤防】

現在の浦安は東西南の三面を水で囲まれ、堤防で周囲を護られている。しかし昔から台風の時期になると、波浪のため堤防が決壊し、その都度住民は甚大な損害を被り、津波による被害も多かった地域である⁵⁾。そうした被害から守るために、堅固な土堤を築くことが、住民の切実な願いだったと思われる。

言い伝えでは、鎌倉時代に天津波で大きな被害を受けた集落の人達が豊受神社付近に土堤を築き、その上に大きな松の木を植え、この松に根を波浪が越さないように願い、「根越さね」と言われた。それで「猫実」というようになったという（浦安町誌編纂委員会1969:4）。この言い伝えによっても、当時の人々がいかに土堤に関心をもっていたかわかる。

そして、最初に作られた一番土堤に続いて、二番土堤、そして三番土堤と東側の海に沿って土堤を増やしていくことにより、面積を増やしていった。

土堤は数メートルの土盛りがしてあるだけのものだった。写真1は昭和24年のキティ台風後の写真で、土堤が決壊して浸水している様子がわかる。右側の耕地側に比べると、木が植えてある土堤が少し土盛りしてあり、高くなっている。この数メートルの高さの土盛りが土堤だった。

そして、主要な道は市川への向かう道が一本



写真1 昭和24年キティ台風で決壊した土堤
提供 浦安市郷土博物館

あるのみで、舟を中心とした交通体系であった。明治22年に堀江・猫実・当代島の3村は合併して浦安村となり、明治42年には浦安町となったが、陸の孤島といわれて漁業を中心として行う生業形態は近世からあまり変化がなかったと思われる。

また、堀江村は境川の南岸沿い、猫実村は境川の北岸沿い、当代島は市川との境近くにある船堀川沿いと自然堤防の上に集落を形成した。これはたびたび被った津波や台風などの高潮の被害から家を守るための手段であったと思われる。自然堤防は広いわけではないので、どうしても狭い土地に家が建ち並ぶこととなる。そのため、家と耕作地が離れており、農業の作業効率は悪く、その上庭が狭いために米を大きく広げて干す場所がなかった。

このように、浦安は水、土、塩、作業環境などから考えると、農業を行う場所としては劣悪な条件下といえるが、その中でこの土地に合った農業のやり方を模索していったのである。

2. 海付きの低湿地における農業

本章では、浦安の農業についての諸事象を、聞き取り調査と文献資料によって提示する。その農業のやり方は、海付きの低湿地ならではの

特徴がある。ここでそうした特徴を中心に浦安の農業を概括することにより、海付きの低湿地における農業のあり方を明らかにしたい。

2.1 浦安の農業の概要

浦安の生業は、漁業を中心として行われているが、自家消費用の稲や野菜、低湿地に適しているハスが作られていた。

明治45年の『千葉県統計年鑑』によると、自作と小作の割合では45%が自作で、小作は51%である。田の合計は96%で、畑は極めて少なく、田を中心とした農業が営まれていた。

作物別面積を『浦安町誌』の数値と比較すると、大正7年には水稻2,295反、蓮根78反、畑作115反で、水稻の作付面積が最も大きかった。しかし、昭和5年以降は、水稻に替わってハスの面積が増えていく。これは、ハスが現金収入になったことと栽培する上で塩害に強いことによる。

また、明治45年の生業の割合で、専業と兼業漁業が65%で、専業農業が1%、兼業農業が34%であり、漁業の比率が圧倒的に多かった。

こうした条件下での農業とはどんなものであったのかを、具体的な聞き取り調査の成果を中心に検討していきたい。

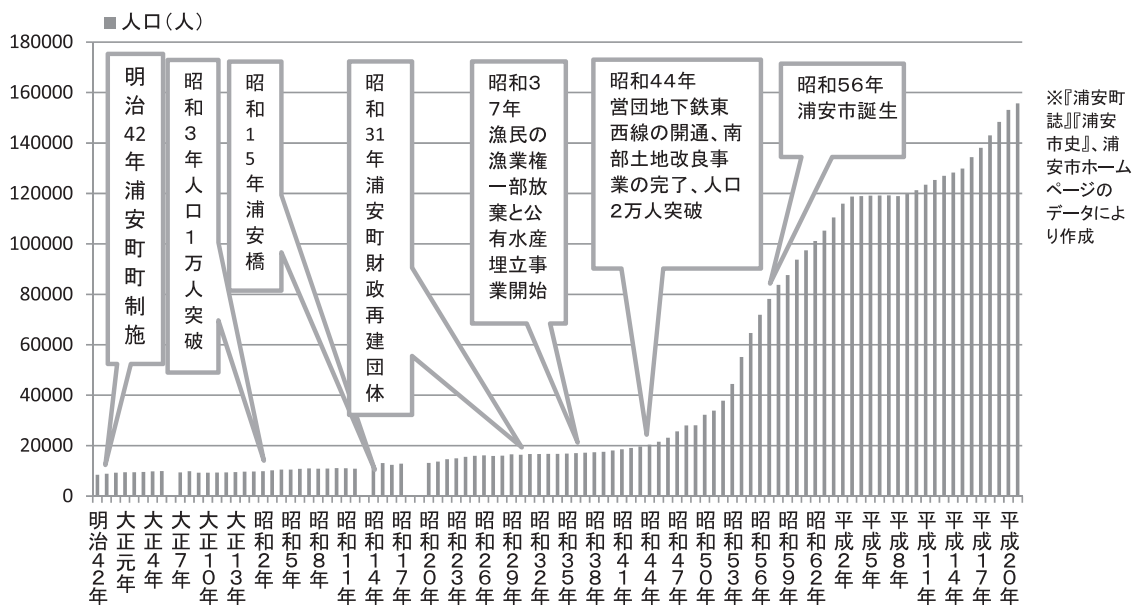


図2 浦安市 人口推移

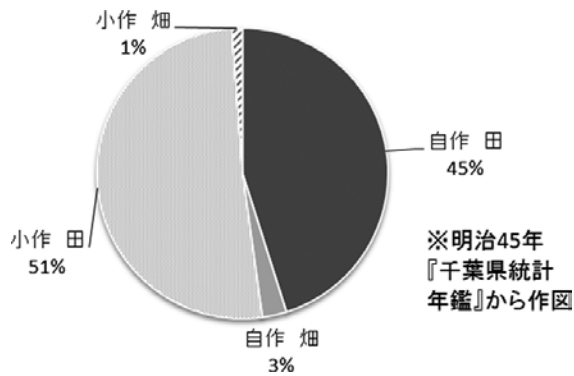


図3 明治45年田畑自作地及小作地反別

2.2 稲作の作業工程における海付きの低湿地での特徴

【海苔干し場とタウンイ】

浦安の田は、海苔干し場に多く使われていたので、海苔干しが終わらないと田をうなうことができない。自分の家の田に海苔干し場を作る場合、その年の気候にもよるが、3月終わるか4月に入った頃に海苔干しが終わって、海苔干し場を壊して、その後にタウンイをした。

浦安は半農半漁だから、田んぼの無い人は人の田んぼを借りて海苔干し場を作り、それを壊すのがだいたい4月、遅いときで4月の終わり頃。それからすぐ田うないを行う。(昭和3年 当代島生まれ)

浦安では小作として稲作をしていない人に海

苔干し場として田を貸すこともあった。その場合、海苔干し場を壊すのがだいたい4月、遅いときで4月の終わり頃になることもあった。それからすぐ田うないを行ったので、田うないから田植えまでの期間が短くなってしまった。このように兼業によって、4～5月の農繁期は大変忙しくなった。

【人力によるタウンイ（タウンイ）】

千葉県では大正期以降に畜力の稲作作業への利用が推進されたが、湿田が多かったため実際に導入されることは少なかった。

浦安でも稲作作業のために家畜が使われることはなく、もっぱら人力で行った。これは耕作面積が少ないことと水路（堰）が小さく、道はほとんどがあぜ道で広い道路がなかったことによる。昭和30年代後半頃に耕耘機等の動力機械が入るまではすべて人がマンガンでうなった。

【ナワシロ（苗代）】

苗代作りと種まきとはだいたい4月に行った。苗代はナアマ、ナーマ、ナワバなどと言った。昭和初期には苗不足になるのをおそれ、種もみをそのまま厚まきにしたので、苗は弱かった。昭和20年前後には、種もみは消毒し塩水選を行い、薄まきにしたので丈夫な苗ができるようになった（浦安町市編纂委員会 1969: 97）。

苗代は、塩気がなく水が確保しやすい場所に作った。昭和20年代後半になると、保温折衷苗

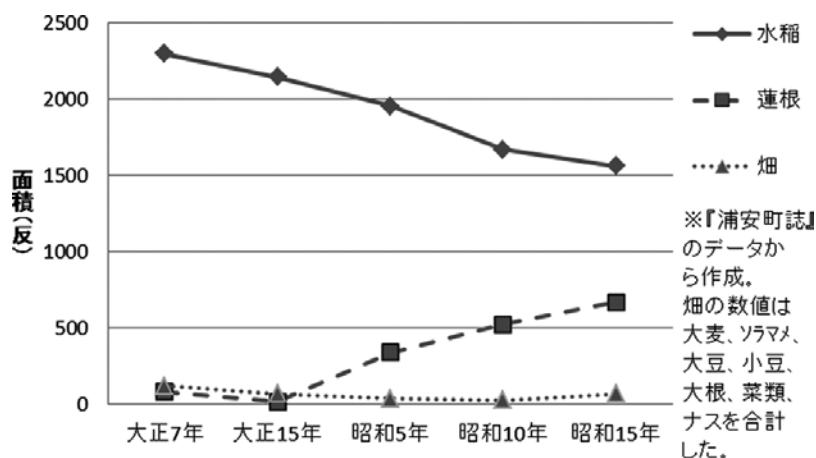


図4 大正7年～昭和15年作物別面積

代を行うようになった。やりかたは、それぞれの家で少しずつ異なっていた。

4月頃から、苗代を作った。苗代を作る田は決まって土目の良いところだった。何枚も作っておいて、稲の種類毎に植える。低い所では駄目なので、土を盛って普通の田より5cmぐらい高くして、水を汲み上げて一杯になるように作る。(昭和8年 猫実生まれ)

浦安の田は低く水の調整が行いづらいため、できるだけ土目のよい高い場所で、塩の影響を受けにくい田を選んで苗代を作った。

【苗取り】

苗取りをネエトリ、ネートリといって上手な人に頼んでやってもらうことが多かった。エエ(ユイ)で来て貰う家や家族に上手な人がいればその人に頼んだ。また、日雇取り(シヨトリ)と言って、専門に賃仕事でやっている人もいた。

苗取りをする人は専門の女性で決まっていて、お金を払って、お願いした。苗取りは素人ではできなかった。(昭和8年 猫実生まれ)

浦安は専業農家が少ないため、苗取りのような技能を問われるような作業は、専門の人にまかせる傾向が強かったと思われる。

【田植え】

田植えを手伝い合ってすることをエエ(ユイ)と言った。「エエにすんべよ」というような言い方をした。

田植えには、多い時で7、8人、少ない時でも5人はいた。2、3人でもやれるが、そのかわり2日間も3日間もかかった。うちは半農半漁だから、だいたい1日、2日で全部終わらせてしまわないといけない。できれば1日で終わらせなかった。小さい百姓の人は半日で終わるから、そういう人はうちに手伝いで来てもらった。

手伝いに来てくれる人は親戚とか、懇意な仲のひとで、お互いの手伝いっこする仲で、給料は払わない。(昭和2年 猫実生まれ)

エエはそれぞれの面積によって頼む人数を決めた。兼業の家がほとんどだったので、男性たちは漁業が主で農業に割ける時間は少なく、自分の家で食べる分だけ作ればよいと考えていたために、田植えは大勢で行うことによって作業効率をよくした。手伝い合う家は、懇意にしている家や親戚が多かったが、面積が小さな家では家の者だけで田植えをすることもあった。

【兼業による作業時期への影響】

稲とハスとを兼業している家は、5月末から6月に田植えをした。これは、田植えとハスの植え付けが5月で重なってしまうためだった。保温折衷苗代になると、田植えが4月末にできるようになり、楽になった。それぞれの兼業の形態によって、田植えの時期は違っていた。

昭和20年頃までの田植えについて、田植えは女達を中心だが、作業は決して楽ではなく「腰の痛さやこの田の広さ、四月五月の日の長さ」と言っていたとしている。また、田に入れば腰を掛ける所もなく、一日中立ったりかがんだりして休み暇もない。疲れた足を引きずりながら、朝に星をいいただいて家を出て、夕べに星を見ながら帰ると述べ、田植え時期の大変さを記している(浦安町誌編纂委員会 1969: 91)。

このように、兼業で行うことによって、田植え前後にはいろいろな作業が重なり、大変忙しかった。

【水引】

田に水を引くのは、三番ウナイの前や苗代、田植えの時だった。田に水を引き入れる堰があって、そこから田へ引いた。水口を、堀江ではトビッコ、猫実ではミノクチ、当代島ではメノクチと言った。ミズグルマ(水車)を水口に置いて、人が乗って足で踏んで水を入れた。慣れてくると話しながら汲めるが、初めは怖かったという。

(浦安市教育委員会教育課 1982: 70)

稲作でも、ハスでも水が必要な時は、水真っ黒でも塩がないか舐めて確認した。塩でちょっとでもしょっぱければ駄目で、成長が悪くなった。おいしい水じゃないと駄目だった。(昭和7年 猫実生まれ)

浦安の土地は海に近い低湿地であるため、そのままだと塩がしみてきてしまった。稲は塩害に弱いので、よい水をいれることが田にとって最も重要だった。田は3日ぐらい水を入れないと下から塩があがってくるのか、しょっぱくなってしまった。

【江戸川からの取水】

江戸川(大川)の水だのみだったので、塩分が入らないよい水を確保するのが最重要課題だった。江戸川から農業用の水を入れる^{いり}塚がいくつもあった。塚には水門があって、水門開け閉めは水番(塚番ともいう)がやっていた。水番は水門の近くに住む人で、浦安という野良男で、始終田にいて、信頼ができる人に頼んだ。潮の満ち干によって、淡水が入る時に水門を開けた。また、排水用の塚もあって、そこも開け閉めする水番がいた。

それぞれの塚のところに一人ずつ水番がいる。排水の所もいた。塚にある水門は、現在のように大きな水門を開く機械ではなく、手で回す水門だった。水門の開け閉めは、時間ではなく、潮ときといって小潮や大潮に合わせて開け閉めした。だいたい小潮には水が入るだけの量が上がってこないから、用は無い。13日から大潮間近にかけて水門を開ける。本当に砂糖水みたいに水がおいしいときがある。浦安の水は3日も水が動かないでいるとしょっぱくなってくる。田の水の状態や堰の水の状態は舐めてみて、調べた。1週間も水が動かなかったら、ドンドンと稲の色が変わってきて

しまう。ハスも生育が落ちてしまう。ドンドン水を換えないと、いけない。雨が降ってくれば一番よくて、雨の水というのは砂糖水のようなだったが、そうは降らない。雨が降らない時は本当に困る。水の入る時間というのが、大潮の幾日と幾日とだいたい決まっていて、「あっ今日はいい水きてんよ」といって、みんな家からクワを持って行ってメノクチを開けて水を入れる。そして必要なだけ入ると、閉めにいって、自分の田んぼをぐるっと回る。だから、水で争いが起こるみたいなことはない。自然に流れてくるから、こっちまで来てないうちに閉められてしまうと困るが、そこはわきまえていて、ある程度全部入るぐらいまでの時間開けてくれる。(昭和7年 猫実生まれ)

田に塩水が入らないように気をつけるが、数日間水を入れないと田がしょっぱくなってしまったので、その調整が難しかった。田に塩水が入ることを「潮がさす」といった。水が入りやすい田には、水口を開けて堰からの水を入れた。水が入らない田には、スイコやウツル、バッチャバッチャ、ミズグルマなどで水を入れなければならなかった。その後、バーチカルポンプなどの動力が入ってきて、作業は楽になった。

浦安では、田に塩水が入ることを「潮がさす」という。江戸川に海水があがってきているときに、塚を開けると塩水がはいってきてしまう。土地が高い所は水がのらなくて、どこよりも苦労した。本当に水がのるのは大潮の13日、14、15ころうじて16日ぐらいだった。^{しおとき}潮時の15日は十五夜で、だから16日になると上げ潮が遅くなる。よく私の子供のころから聞いていたのが「^{たちま}19忽ち^{ようかよいやみ}20日宵闇」と言って、だんだん月の出が遅れてくると、いっしょに潮の満ち潮も遅れてくるので、16日になるともう夕方になった。今のように街灯がないか

ら、止めに行くのが怖くて、小さい四角の懐中電気をもって、誰かを連れて行って、止めてくる。まず、田に水をいれる口をエンピで田のクロ（田んぼのあぜ道）の泥を削って、下へぎゅうぎゅうに押し込めてから自分がその上によってドンドンと踏み固めてから、田んぼの泥をいれる。それをきちんとやらないと、あくる日に水がチョロチョロチョロ漏ってしまっていて、せっかく入れた水が無くなってしまう。（昭和3年 当代島生まれ）

このように、浦安は海沿いの低湿地であるため、農業のための水は江戸川からしか取水できなかった。塩分のない「おいしい水」を田に入れることが最も重要だった。塩気が無いかどうか、田や堰の水を舐めて確認することは日常の行為だった。そのため、昭和33年に本州製紙江戸川工場悪水放流事件が起きた時、最初に気がついたのは農民だったという。常に水を舐めている彼らは、環境の変化に対して敏感な感覚を身につけていた。

【稲の品種と稲刈りの時期】

早^{わせ}稲、中^{なか}生、晩^{おく}稲と植えている家もあった。しかし、海苔と兼業している家は10月には海苔の種付けがあるので、晩稲はやっていなかった。

作っていた品種は、早稲は農林一号で、その他にはギンボウズや農林八号（晩稲）という品種だった。一時にできてしまうと、台風などが来ると収穫が無くなるし、干す場所も無いので、順序よく刈り取る必要があった。ギンボウズはおいしくなかったが、米自体が大きく、穂が長いので石^こ（量）があった。葉っぱの裏がトゲトゲ、ザラザラだった。農林一号は、粘りがあって美味しかった。葉っぱの裏も表もスベスベだったので、さわればすぐわかった。剥いた米も、他とは全然手触りが違った。農林八号もおいしいが、晩稲だったので、10月頃にならないと稔らない。だから、

必ず台風にあうので、台風の南風で倒れないように、南に向かって縦になるように植えて、間を空けて風が通るようにした。それでも強い台風だと倒れてしまった。また、丈が長くて弱いから、湿った良い土でなければ倒れるので、どぶっ田には植えなかった。どぶっ田は、膝以上ぐらいまで足が入ってしまうほど深く、大体ギンボウズを植えた。猫実さはほどでもなかったが、堀江の造船所あたりはどぶっ田が多かった。もち米は自分の食べるだけくらい作っていた。（昭和8年 猫実生まれ）

稲の品種としては、海沿いで塩害の被害を受けやすい為に塩に強い品種であるギンボウズを多く栽培しているのが特徴である。ギンボウズは美味しくはなかったが米粒が大きいので、収量をかせぐことができた。

また、晩生は田を海苔干し場として使用する家ではほとんど作っていなかった。

【ノロシ】

刈り取った稲は、作業場や使い勝手のよい田などにノロシ（オダ）に掛けて干した。浦安では田の面積が小さいので、猫実地区ではノロシを四段にしている、堀江地区は田が多いので三段に干すことが多かったという。

刈った稲を二つに割って干すワリボシと稲を二つに折って干すオリボシがあった。ワリボシの藁はその後海苔干し場に使うなど、利用価値があった。オリボシは藁が折れてしまうので、海苔干し場には使いにくかったが、時間が掛からなくて簡単だから、オリボシにする家も多かった。漁業だけをやっている人に売ることもあった。

また、干したワラは、海苔干し場以外には米を炊く燃料などにするため物置で保管した。浦安には森や大きな木がほとんどなかったので、米を炊き時の燃料としてワラや刎は貴重だった。

【トウミ】

浦安のトウミは、千葉県に多い上総唐箕よりも横幅が小さく、コンパクトだった。トウミの

形態については、今後の課題としたい。

【1反あたりの収量】

浦安では、1反5～6俵ぐらいが標準だった。

米は1反で5俵ぐらいしか穫れなかった。浦安の海っぺりの米はうまくない。不味い。海に近いからいくらか下から塩がさしてきて塩水になる。だから、なおできが悪い。(昭和6年堀江生まれ)

収量が少ない原因として、やはり塩害の影響があったのではないかとされている。

【肥料】

豆ガニやキシヤゴ(イボキサゴ)を江戸時代から昭和の時代中期まで田に撒いて稲の肥料とされてきたという(浦安町市編纂委員会 1969: 97)。内房から東京湾沿岸でキサゴを稲の肥料とすることは多く行われていることだった(川名 1988: 9)。沿岸で穫れたキサゴをそのまま山積みにしておいて、田植え後に肥料として使ったという。しかし、今回の聞き取り調査で確認することはできなかった。聞き取りでは、基本的には肥料として下肥を撒いており、その後化学肥料が入ってきたという。

【どぶっ田】

浦安で、よい田は高い所であって土が硬い所だった。それに対して、低い所で常に田に水がある粘土質の田んぼを「どぶっ田」と言った。開墾して作った田は「どぶっ田」で、土質が酸性だった。そこで、浦安町農会は下肥えのかわりに、有機肥料や化学肥料の使用を奨励し、酸性の甚だしい田には石灰を使って中和させ、各部落ごとに実地講習会を開催し、毎年3月には堆肥積み込み週間を定め、堆肥による土壌の改良を促したという(浦安町市編纂委員会 1969: 97)。

このように、「どぶっ田」や塩分が濃い田では収量は少なく、とれる米の味もおいしくはなかった。耕作している面積も2反から5反程度が多く、ほとんどが自家用の米で1反5～6俵しか穫れな

かった。品種も、ギンボウズなど湿田でもよく穫れた米で、量は穫れたがおいしくなかった。しかし、終戦後は農林1号などが出てきて、農業改良が進み、収量も1反8～9俵穫れるようになり、機械も導入されて、これから農業がよくなっていくと思われた矢先に、地盤沈下で田として使えない場所がどんどん増えていってしまった。地盤沈下した田の一部はハス栽培へと転換した。地盤沈下の問題は浦安の農業に大きな影響を与えたのである。

2.3 海付き低湿地であることによるデメリット

ここまで浦安での稲作のやり方を見てきたが、海付きの低湿地であることは稲作に大きな影響を与えていた。まとめると下記ようになる。

① 兼業による作業時期の影響

海苔との兼業では、田を海苔干し場として使用しているため、4～5月の農繁期は大変忙しくなり、晩生は作らないなどの影響があった。

また、ハスとの兼業では、5月はハスの植え付けと重なってしまうため、ハスの植え付け後に田植えを行っており、繁忙期が重なってしまった。

② 塩害による影響

1. 品種の制約

塩害に強いギンボウズが主流だった。

2. 水の確保

数日で田に塩が差してしまうため、常に真水を入れないとならなかった。

3. 収量の減少

塩のために海側の田は風が吹くと赤くなって枯れてしまう被害が出た。また、食味についてもまずかったという。

4. 低湿地であることによる影響

どぶっ田といって、低い所で常に田に水がある粘土質の田は、土質が酸性だった。

このように、兼業と塩害により、浦安での稲

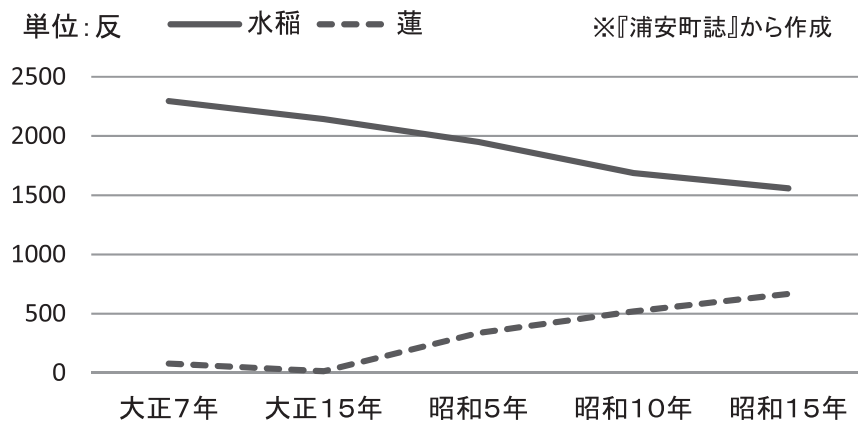


図5 大正5年～昭和15年 稲・蓮 作付反別

作はこれまで漁業の影に隠れた存在であったが、実際には自分たちの主食をまかない、女性を中心とした生業として行われてきたことがわかる。

3. ハスと下肥

3.1 ハスの導入と栽培面積

ハスの栽培は、浦安が低湿地であり、東京に近い立地であることから、盛んに行われていた。

『浦安町誌』による作付反別で、大正7年から稲作は面積が減少しており、それに対してハスの面積は増加している。また、収穫高ではハスが、大正15年以降急激に増加しており、蓮根が換金作物として生産が盛んになっていった様子が伺える。

三谷紀美『浦安・海に抱かれた町』には、平野石太郎（明治36年生まれ）からの聞き取り調査で次のように述べている。自分が子供の頃はハスをやっている人はいなかったが、昭和5年頃から稲から転作する農家が急に増え、昭和32年には堀江だけで319軒の人が作っていた。（三谷1995）

このように、昭和初期にはハス栽培に転作する家が増えていった。江戸川の対岸の葛西のレンコンは江戸川レンコンといって、浦安に入ってきたという。ハスは稲よりも手がかからず、また塩分にも強かった。こうした理由から、稲からハスへ変えることが多かったとされる。し

かし、ハスは収穫などに技能が必要であり、専門のハス職人に頼むことが多かった。

【ハスの肥料】

ハスの肥料は下肥で、カンゴエと言って冬場の1月2月に入れた。普通の稲作の5倍は必要だった。東京の江戸川沿いから大きな糞伝馬に下肥を積んで来て、ヒトツ坎の辺の船着場で、柄杓の大きい桶のようなもので小さな伝馬船に流し込んで移した。それを堰を使って、自分の田に運んでいった。1舟いくらというようにして買った。田の近くまで船で持っていき、船から田までは天秤棒で担いで行って、田の畔の上から肥柄杓で播いた。

浦安でテンマとベカは異なる船で、スナヤマテンマ、ミズヤノテンマ、コエテンマなどのテンマセンがあった。その中で、肥料を運ぶのがコエテンマだった。下肥を運ぶにはベカ船では安定しなかった。大きな伝馬船で江戸川から下肥を運んで来て、ヒトツイリ付近の船着き場に着けた。そこで、コエテンマに載せ替えて、堰を引いて蓮田まで持っていって、肥タゴに入れて、冬の間に蓮田に撒いた。

道路ができてからは、バキュームカーが直接田に入れるようになった。

コエテンマはコエブネとも呼ばれ、農家が下肥をハス田に運ぶのに使用した船である。シキの部分を広くしたヒトダナ（一枚棚）の船で、

ミヨシの部分も広がっており、コベリがつくという。浦安では農家が少なかったため、船大工もあまり数を作らなかったが、行徳からは注文が来ることもあった（浦安市教育委員会 1993: 29）。

ハスには大量の下肥が必要だったので、各家からだけでなく、東京の下肥を持ってきて活用していた⁶⁾。こうした大量の下肥を持って来るには、肥船による以外の移動手段はない。海付きであり、東京に近いことを最大限に生かして肥料を確保しているのである。

【トウヅル】

ハスの蔓の部分をトウヅルといって、福神漬けの材料になった。

ハスの一番最後に尻尾があって葉っぱになり、その間に蔓が出ていた。そのツルをトウヅルと言った。行徳の伯父さんがハス掘りの職人をやっていたから、そこの田のトウヅルを全部採ることができた。トウヅルを切り取って収穫し、自転車に積んで、葛西の福神漬工場にまとめて持って行くのが秋から冬のアルバイトだった。工場ではトウヅルを洗って、機械で小さく切って、福神漬けに入れていた。トウヅルはいい小遣いになった。（昭和20年 堀江生まれ）

このように、ハスによる収入の他に、トウヅルを葛西の福神漬工場に持っていくことにより、収入を得る人もいた。

3.2 地盤沈下とハス栽培

浦安でいつから地盤沈下が起こり始めたかは不明であるが、戦時中から始まっていたという。ひどくなってきたのは昭和30年代で、堀江地区が多かった。地盤沈下で田が平らでなくなると、稲作はできなくなり、田をハス田に替えた人が多かった。ハスは稲よりも塩害には強かったが、それでも地盤沈下がひどくて塩がはいってきて

しまった田ではよいハスは穫れなかった。

田んぼが地盤沈下で沈んでしまって、そのために稲を植えても良い米がとれなかった。それでみんなハス田に替えていった。地盤沈下は、猫実では大宮割とか郷蔵尻などで、堀江の地盤沈下はもっとひどくて、みんな「どぶっ田」になってしまった。だからみんなハスを植えた。ハスを植えたが、海水が入ってしまったから良いハスも取れなかった。「うちの田んぼ駄目だからハス植えてくれよ。」と言う人がけっこういた。うちの種ハスをそこへ持って行って、植えて手間をもらった。掘る時にも自分が行った。戦争が終わってそんなに間がないうちにハス田が急激に増えていったと思う。（昭和8年 猫実生まれ）

ハスは植え付けが5月頃で、8月まで水の管理や草取り、根回しを行い、8月の盆過ぎに収穫が始まり、12月まで収穫できた。ハス掘りは難しいので、職人でないとできなかった。掘ったハスを洗って、梱包するのがアライッコと呼ばれる専業の女性たちだった。冬の寒い中でのハス掘りや洗いは重労働だった。出荷は自分で市場に持っていったり、問屋に出荷した。ハスは時価だった。ハスの肥料は下肥で、冬に入れたが、当初はテンマセン（伝馬船）が使われていたが、道路ができてバキュームカーが直接田に入るようになった。昭和30年前後が最盛期で、堀江では、一二百十坪のハス田で366貫（約1373キロ）の収穫の記録があるという。

しかし、昭和40年代になると一気に宅地化が進み、農業は終焉を迎えることとなった。

このように、昭和30年代に高度成長期の大量の地下水汲み上げの影響により地盤沈下が進行する中で、稲田として耕作が不可能になった田を、塩害に強いハス田に替えていく人が増加した。これまで劣悪な条件下でも成り立っていた生業は環境が悪化していく中で、選択肢は狭め

られていった。

3.3 海付きの低湿地におけるメリットとデメリット

海付きであることから稲から塩害の被害を受けにくいハスへと転換したが、それにはメリットとデメリットがあった。まとめると下記のようになる。

① 東京近郊の海付きであるメリット

ハスは大量の肥料が必要であり、そのための下肥を東京から肥船で持ってくる事ができた。

② 新たな仕事の発生

ハス栽培は、専門的な技術が必要であり、ハス職人という新たな専門職が発生した。また、交通不便地であった浦安では、集荷したハスを東京に出荷するための運び屋などの職も増えた。その上、トウヅルを葛西の福神漬け工場に持っていくなどの収入にも結びついた。

③ 塩害による影響

ハスは塩害の影響を受けにくいですが、それでも江戸川と海に挟まれた浦安では塩害を受けて、収穫高が少なくなった。水の確保は、江戸川での工業用水の取水などによって川が淡水である時間はどんどん少なくなっていき、水路から真水を入れることが難しくなっていた。

④ 地盤沈下による影響

地盤沈下は、葛西方面の工場での取水により昭和30年代になるとひどくなっていき、それに伴って稲を作れなくなった田をハスに替えていった。場所によっては、ハスさえも栽培できなくなった。特に昭和35年頃に地盤沈下は堀江から富士見にかけて急激に悪化し、田が池沼化して耕作不能になってしまった。

このように東京近郊の低湿地であることから、地盤沈下という公害にも見舞われることとなっ

たのである。

4. 浦安の漁業

4.1 明治時代から昭和初期までの漁業

浦安での漁業人口は、三方を旧江戸川と海に囲まれている立地から、明治45年の『千葉県統計年鑑』によれば、漁業専業と兼業の戸数は全体の65%であり、そのうち漁業専業に52%が従事している。それに比べると専業での農業従事者は2戸しかなく、農業兼業は34%である。

漁業の内容では、『東京都内湾漁業興亡史』による東京都内湾の漁獲高で比較すると明治41年までは魚類の生産高がそう類（藻類）や貝類よりも多かった。内海では、近世後期になると漁獲高の低迷が問題となり、漁民はその原因を乱獲と認識して、文化13年に相模・武蔵・上総の計四十四浦が新規漁法の禁止などを定めた議定書を結んでいる⁷⁾。明治中期までの東京湾の漁獲高は不明であるが、明治38年までは藻類や貝類よりも魚類の漁獲高は多かったが、明治末から魚類の漁獲高は低迷し、大正期は藻類の生産高が最も多くなり、その後貝類の生産高が増加していく⁸⁾。これは、藻類や貝類の養殖によるものだった。浦安でも、ほぼ同時期にこれらの養殖を行うようになっていく。

このような海苔と貝の保護と養殖により、海苔と貝類の漁獲高は順調に増加し、昭和3年には人口が一万人を突破した⁹⁾。

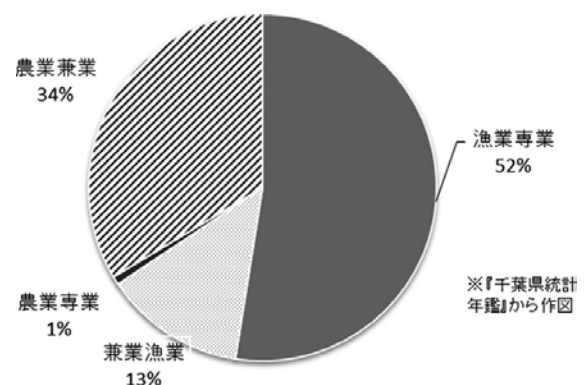


図6 明治45年農業・漁業 生産割合

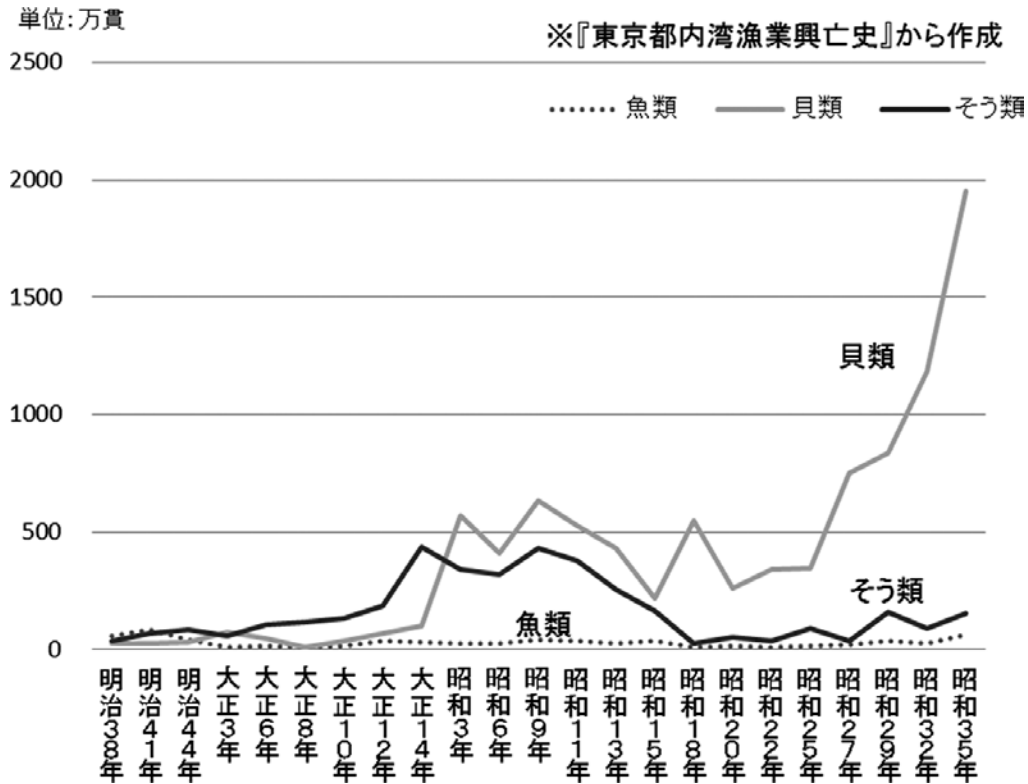


図7 東京湾 年次別、水族別生産高

4.2 海苔養殖

浦安の地先海面は、東京湾の最奥部に位置し、広い遠浅の干潟になっている。そこに、海水と江戸川の淡水が交じり合い、海苔養殖に適した場所である。

房総での海苔養殖は、江戸時代に近江屋甚兵衛が成功したことに始まるが、浦安でも明治18年に越中島地先海面を海苔養殖場として使用許可の出願をして、19年に許可を受ける。1万5千坪の使用権を取得し、その後年々発展した。そして、浦安の地先海面が海苔養殖の適地であることを発見し、明治31年から海苔養殖が始まる。次々に海苔養殖の許可を受けてその面積を広げていき、明治41年には東葛飾郡の海苔生産額18万円のうち浦安町産が9割を占めるようになり、明治44年には養殖坪数37万2649坪となり、町の基幹産業へとなっていった。

浦安では、海苔と稲作を組み合わせで行う兼業が多かったという。その理由として、下記の三つの条件があげられる。

- ① 作業期間が、海苔は10月頃から3月頃まで、稲作は6月頃から10月頃までであり、忙しい時期が重ならない。
- ② 海苔干し場として、南向きの田が必要である。
- ③ 海苔干し場を作る材料として、ワラが必要である。

つまり、海苔の作業と稲作の作業は繁忙期が重ならないため労働力の分散化が可能だった。そして、海苔干し場としての田がなければ借りるために現金が必要であり、海苔干し場を作るためのワラもなければ購入しなければならなかった。海苔と稲作はうまく組み合わせることができたため、兼業が可能となった。

しかし、忙しい時期が重ならないと言っても、海苔と兼業している家では夜7時頃に寝て、11時には海苔取りのために起きる時もあったほど、厳しい労働環境があった。

【海苔のヒビ立てと海苔干し場としての田】

海苔養殖を行う時期は、9月に場割りをして、

秋の彼岸頃からヒビ立てが始まる。10～11月には新海苔が採れて、3月終わり頃まで海苔採集が続き、その後かたづけをする。それに対して、稲作は5月末から6月初旬に田植えを行い、9月が早稲の稲刈りにあたる。聞き取り調査によると田植えは一斉にしてできるだけ短時間に行った方が労働効率がよいためエエ(ユイ)で行ったが、稲刈りはそれぞれの家で行うことが多かったという。9月には、海苔のヒビ立てと早稲の稲刈りが重なる。しかし、稲刈りは早稲、中生等の品種によって時期が異なるため、労働力を分散させることができた。海苔が最も忙しい収穫時期に重ならなかった。

海苔干し場は、田を利用して作られる。夏の間は田として使用していて、秋の収穫が終わった頃から、11月の海苔が採れはじめるまでに、順々に干し場に作りかえていく。自分の田を持っていない人は、農家から田を借りて、借り賃を払って干し場を作った。

海苔干し場の土台とするために田の土で土台を作る作業をヨリアゲという。猫実の場合、広さ7～8畝くらいまでの南向きの田を利用して干し場を作った。干し場と干し場の間隔は、日陰にならない程度で、一つの田でいくつかの干し場ができた。柔らかい田の場合、最初は手で土を盛ってヨリアゲをした。固いところではスコップなどを使用した。ある程度できたら、最後に



写真2 海苔干し場
提供 浦安市郷土博物館

クワで平らにした。よりあげた部分には、水はけがよいように藁を敷いたり、砂をまいたりする(浦安市教育委員会 2003: 21、22)。聞き取り調査では次のように語られている。

田で稲刈りが全部終わったら、9月の終わりから10月にかけて海苔干し場を作った。エンピで稲株がついているのを両方から上げてそのまま集めて、土手を作った。場所に合わせるが、75cmか80cm幅で、南向きで、ヨリアゲと言った。エンピは、スコップよりもっと長く、先のほう尖がっている。それから角は鋏でピタッピタッと作って、田の畔と同じようにした。(昭和20年 堀江生まれ)

自分の田や小作をしている田を海苔干し場にする場合と稲作をやらないで海苔だけをやっている家では、状況は異なっていた。

稲を刈り終わってから海苔の仕事に取り掛かった。田んぼを持たない人は、田んぼを借りて、そこへ海苔干し場を作る。だから、農業をやっている家の場合は、オダガケと海苔干し場を作る材料は両方使えた。そうしたことから、農業をやっていた家ほど、海苔柵は大きくやっていた。海苔網を張る柵の1軒の割り当てが17、18、20柵ぐらいだった。海苔を大きくやっている家は、その割り当てを親戚など海苔をやらない家から借りる。農家の場合、海苔干し場の材料もあるし、海苔干し場の田もあるので、海苔柵もいっぱいやれる。(田んぼを)海苔が終る3、4月から田として使って、9、10月からオダを作って稲を干して、そのあとすぐオダを壊して海苔干し場にした。(昭和8年 堀江生まれ)

このように、干し場の面積や材料などから、稲作を多くやる家ほど海苔も多く行うという関係ができあがっていく。また、稲作をやってい

ない家では田を借りて行うために、準備やかたづけの時期は制約がある場合もあった。

自分の田を稲作と海苔干し場として使う場合、場所を有効に活用できるので米を自家用として作って、海苔で現金収入を得ることができた。それは、作業時期、田の海苔干し場としての活用、ワラや丸太等の活用など、時間、場所、モノを最大限に有効活用でき、浦安のように塩害のために稲作としては生産力が低い土地を最大限に活用させることができる方法であった。

4.3 貝養殖

貝養殖は、明治30年代から貝の養殖と保護が行われるようになり、現在十万坪といわれている場所で稚貝の養殖を始めた。また、明治末年頃に蛸内にアサリを主として貝養殖を始め、その後ハマグリ養殖場も作った。

稚貝は5月頃にまいて、アサリはその年の冬から採り、ハマグリは翌年から採った。採り方は舟を使って大がかりに行うオオマキと一人で行うコシタブがあった。

農業と貝養殖が直接結びつくことはなかったが、貝にまつわる仕事には主に女性が行っていた貝むき、行商や佃煮関係や貝灰なども含めると多岐にわたる仕事があった。聞き取り調査では農繁期には農業を行い、農閑期に行商に行くこともあったという。

夏の間に合間をみて行商に行った。行商では、魚、佃煮、貝類を東京へ自転車で売りに行く。アサリは浦安でいっぱい穫れるから、浦安の男はみんな中学生時代から、夏休みになるとアサリ売り（殻アサリ）に東京の方へ売りに行った。（昭和7年 猫実生まれ）

浦安は東京に近い立地ではあるが、昭和15年に浦安橋が東京都江戸川区葛西まで架かり、昭和44年に営団地下鉄東西線が通るまでは、「陸の孤島」と呼ばれる交通の不便な地域であり、浦

安から外へ働きに行く人は少なかった。昭和32年の『浦安町勢要覧』には、町の最大の経済収入源である漁業はここ数年来不振に加えて、人口は斬増し、住民一般の生活は苦境に追いつめられているとしている。狭い漁場に一家を挙げて依存することなく、二、三男はもちろん女子も将来性ある職業を外に求めることが、現今の緊要事であり、町は市川公共職業安定所と協議して、昭和31年3月に役場内に職業斡旋連絡事務所を設けたとある。（浦安町役場 1958: 40）。

交通不便地域であるため商業や工業的な発展が遅れ、人口は自然増で伸びていく中で、仕事を細分化し、分業化を図ることによって生計を成り立たせていったのである。

4.4 漁業不振による影響

町の最大の経済収入源である漁業の中でも海苔生産高は昭和30年前後に不漁が続く、特に昭和30年の深刻な不漁は大打撃であった。農業でも、昭和30年代から悪化していった地盤沈下、江戸川沿いの工場の取水や江戸川放水路の建設により、塩害がひどくなっていった。

結果として、町民の税収は落ち込み、町の財政は逼迫して、昭和31年に浦安町は財政再建団体となった。そして、昭和33年に本州製紙江戸川工場悪水放流事件がおこる。その翌年に町議会は大型遊園地の誘致を決議し、埋立事業促進要望書を県に提出することとなる。

その後は、漁業権の放棄、土地改良事業を進め、昭和44年には営団地下鉄東西線が開通する。ある農家では農業を辞めた原因を次のように語っている。

宅地が増えてきて、洗濯の水など汚れ物が田んぼへと入ってきてしまうようになった。その頃は排水がしっかりしていなかったの、生活廃水がそのまま田んぼに入ってきてしまった。田んぼに良い水が来なくなってしまったのが一番の原因だった。親がいなくなってしまったの

で、兄貴が農業を辞めることを決めた。(昭和8年生まれ 猫実)

このように、漁業と農業を中心とした生業は終焉を迎え、漁師も農民もいなくなった。

5. 浦安の生業形態

海付きの低湿地での農業は、分業による作業時期や新たな仕事、塩害など、さまざまなメリットとデメリットを伴いながら生業のやり方を変化させて発展していった。稲作は、苗取りや日雇とりによる作業の手伝いが必要だった。ハスは、東京へ運ぶための運び屋や蓮根組合や東京市場など運送や組合などの仕事を生んだ。貝漁は、フカシ屋や佃煮屋、ムキミ屋や貝類問屋や行商などの加工や問屋、販売などの仕事を発生させた。魚漁は仲買などの東京を中心とした販売網に繋がった。海苔は、仲買人や運び屋、海苔問屋などの流通や出荷にたずさわる仕事によって成立した。これらの生業は、年間とおして行うものもあるが、ほとんどが作業工程や穫れる時期などによって行うものだった。また、レンコンのトウゾルを福神漬け工場に持っていくことなど、職業と言いかねるが、それが現金収入へと繋がっていく。

分業のやり方も、夫がハマで妻がオカでの仕

事を分担し、それ以外の家族もそれぞれの役割を担うことによって、生計を成り立たせることができる。子供でさえも、幼い頃から海苔干しを手伝ったり、農業を手伝ったり、行商に行ったりする。親も長男や長女は労働力としてあてにしている部分があり、懸命に生きる中で支え合うことは当然であった。

その中で稲作は、「おっかあ百姓」を中心に支えられてきた。戦前までは女性が船に乗ることは禁忌であり、母親は子供を育てながら、稲作の日雇取り、貝剥きなどオカの仕事を生活を支えていた。嫁さんは重要な労働力として、野方（ノガタ）といって船橋などの農家からもらうことが多かった。

そして、分業のバランスは、それぞれの家の労働力と耕作する面積によって、異なっていた。

半農半漁の1年間のサイクルは、極端な言いかたすると米とかハスができる時には百姓をやる。百姓が暇な時に、海に行く。だから例えば冬場になって田んぼが何も作れないと、今度は海の仕事をやる。海苔をやったり、アサリを獲ったり、いろいろなことをする。それが終わって春先になると、海苔などが終わる。終わると百姓に戻る。海苔は大当たりの年でも3月に入れば、だいたい終わる。海苔を片付

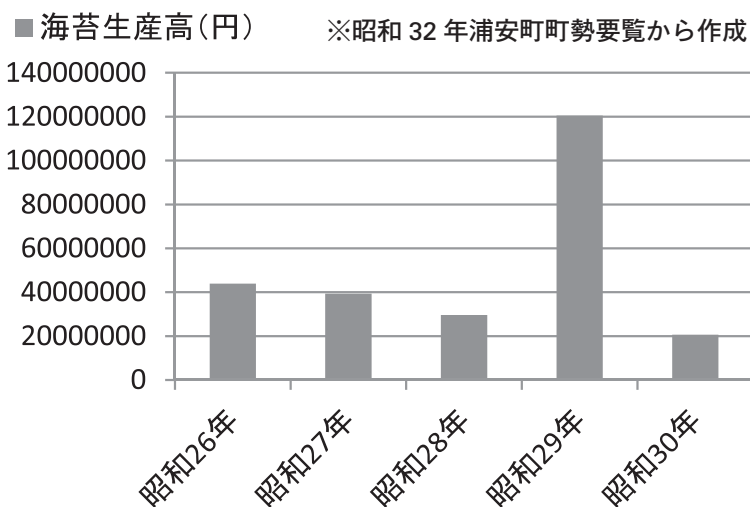


図8 昭和26～30年 浦安町海苔生産高

けると、今度は百姓の一番畝とか二番畝とかが始まってくる。海苔をやるには、海苔干し場となる田んぼと海苔干し場を作るため稲のワラが欠かせない物だった。だから、漁師でも自分の干し場を作るだけくらいは、小作でも自作でも田んぼを持っていた。自分たちの時代は一年中アサリ獲りが多かった。自分は海苔とアサリと、百姓をやったが、親父がいる時は夏場に打瀬やアサリ採りをやった。打瀬は戦後まもなく止めた。ハスも多少やっていたので、ハス掘りはお正月近くになるとやった。(昭和8年生まれ 猫実)

このように、基本は稲作とハスと海苔をやっている家でも、少しでも余力があればアサリ獲りなど漁業も行った。アサリ獲りは大マキといって大きくやる漁業は漁業組合に場所代を払わなければならなかったが、腰タブといって個人で取るような漁は届け出をしなくてよかった。また、海苔や稲作は収穫があるまで収入が入ってこないため、ハスやアサリのようにすぐに現金収入に繋がる仕事が必要であった。アサリが安い時には、行商により利益を得た。

また、ハス作りは、ハスの扱いが難しいため専門の職人に頼んでやってもらい、収穫時の洗い子の人手が足りない場合は日雇取りに頼む家もあった。洗い子の日雇取りは、秋田などの女性で、焼きアサリ屋の人が世話(斡旋)をしていた。

稲作についても、最も忙しい田植えの時期は、何軒かで手伝い合ったり日雇取りを頼んだ。稲刈りでも女手一つで人手が足りない家では日雇取りを頼んだ。

これだけではなく、ハスの運び屋、問屋、貝のムキミ屋など数多くの仕事が存在して、それぞれが稲、ハス、海苔、魚漁等の収穫や作業が忙しい時期によってうまく分業しながら生活が成り立たせていた。

また、かつての浦安は陸の孤島といわれるほ

ど、交通の便が悪く、昭和13年に浦安橋ができるまでは江戸川を渡る橋はなかった。そのため、東京へ通いで働きに行くことはむずかしく、分業化を進めることにつながっていったと考えられる。専門的作業や流通、問屋などの仕事を細分化して分業する。浦安は、三軒長屋があったように川沿いに密集した生活しており、集落内はほとんどの家が屋号でわかるような密接なつながりを持った地域である。仕事を頼むのはつながりの中で知りえた仲間であり、それぞれのパーツをつなげることによって生業を成り立たせていた。

浦安は、明治末から海苔養殖や貝養殖を盛んに行うようになり、昭和初期頃からハス栽培を行うようになる。特に、漁獲高の減少に対抗するために新たな技術として海苔養殖と貝養殖を導入していったと考えられる。また、ハス栽培は現金収入につながり、これも新たな技術導入といえる。その結果、人口増加が顕著になって、稲作面積は減少していくのである。

聞き取り調査や文献資料では、昭和20～30年代に稲作、ハス栽培、魚漁、貝漁、海苔など、それぞれの生業が成り立つために、稲作では日雇とり、ハス栽培ではハス職人や洗いっ子、魚漁では行商、貝漁ではムキミ屋や行商、海苔では運び屋などに分業していった様子が伺える。それを図化したのが、図9である。矢印はモノの移動を伴い、線だけのものは専門的技術によるつながりである。

しかし、分業化を進めても、基盤となる生業(漁業や農業など)が不振であると、それに関わるすべての人に影響していかざるを得なかった。こうした集落全体の生業の変化がどのように起こっていくのか。そして、その変化を人々がどのように受け入れていき、全国的にみて一般的であったのかどうか、さらなる検討が必要である。

6. N氏の生業

ここまで聞き取り調査や先行研究等により、浦

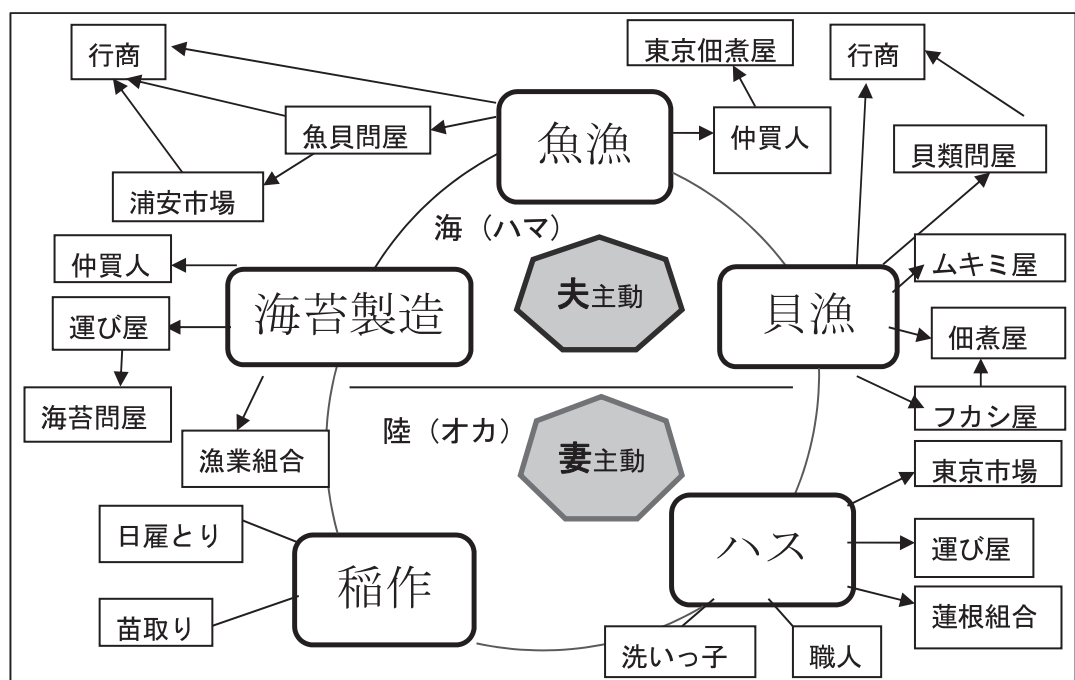


図9 浦安の生業相関図 ※聞取調査、『浦安市魚撈習俗調査報告書』から作成

安の生業について記してきたが、それだけでは概要はつかめても具体的な日々の生活については、なかなか理解できない。そこで、この節では浦安在住のN氏（1926-1981）の手帳から、生業の一年のサイクルや変化を分析することとしたい。

N氏は、堀江に住み、稲作、ハス、海苔、漁業などを行っていた家である。N氏が漁業を中心に言い、妻が農業を中心になって行っていた。手帳は、簡潔に仕事や行事等を記している。

昭和23年～35年までの33年間の手帳があるが、そのうち昭和28年、30年、40年の3年間を比較検討する。なお、手帳の生業に関わる部分のみを対象としている。主な生業の一年間のサイクルを表にしたのが図10～12である。

【生業暦の比較】

昭和28年は、3年前に浦安にできた4Hクラブが盛んに活動し、保温折衷苗代が普及し始めた頃であった。カレイ漁を2月末～4月上旬に行い、3月末～4月まで海苔の片づけ、4月にハスの準備と稲の苗代作り、5月上旬には作業の合間をぬってアサリの行商に出かけ、中旬にハス植えを行っている。田植えは記載がないので、この

年は手伝わなかったのかもしれないが、5月下旬から6月上旬だったであろう。そして、5月下旬～9月上旬の夏場は農作業が少ないため、ケタ漁を行い、7月下旬には葎こしらえを行っている。9月下旬に稲のノロシ作り、稲刈り、ハス掘り、10月末にはノロシをこわしているの、稲刈りはすべて終了し、今度は田を海苔干し場にして、10月下旬には海苔取りが始まり、春まで続く。

昭和30年は、海苔が大不漁の年で、浦安町が財政再建団体になる前年であった。生業暦では、稲とハスについては昭和28年と大きな違いはない。葎の期間は7月いっぱい延びた。大きな変化は、漁業を行わなくなっていて、アサリの行商を5月末～8月いっぱい行っていることである。漁業を辞めた理由は不明である。その年の11月以降は病気になったため、手帳には生業に関する記載がない。

昭和40年は町全体が大きな変化の中にある年だった。昭和37年には漁民の漁業権一部放棄と公有水産埋立事業が開始された。農業でも、昭和39年に北部土地改良区が、昭和40年には南部土地改良区が設立した。生業暦では、稲とハス、

行商					アサリ行商							
葎									葎こしらえ			
漁業			カレイ漁		桁網造り			ケタ漁				
稲				苗代 田起こし 畦つけ					のろせ造り 稲刈	稲こき 縄ない	のろせこわし 米こしらえ	
蓮			蓮堀り 石灰	下肥 こしらえ	蓮植え				蓮堀	肥上	蓮堀	
海苔		海苔取り	海苔かたづけ			申込	網造り	柵くじ	張込		乾場造り	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月

図 10 昭和 28 年 N 氏生業暦

葎									葎こしらえ			
行商						アサリ行商						
稲				種まき 田うない	苗代 畦つけ	苗代消毒 田植え	消毒 田の草取り		のろせ造り 稲刈	稲こき		
蓮			掘取 肥出し	石灰 蓮田作り	蓮堀り 蓮堀	田の草取り 芽まわし			蓮がら刈り 蓮堀り			
海苔		海苔取り	海苔かたづけ			申込	網造り	柵くじ	張込		乾場造り	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月

図 11 昭和 30 年 N 氏生業暦

短期労働									短期労働			
行商									アサリ行商			
稲			種消毒	種蒔 田うない	苗代 開墾	田起こし 田植え			のろせ造り 稲刈	稲こき		
蓮				肥出し	蓮堀り 蓮堀	蓮堀	田の草 芽まわし			蓮堀	蓮堀	
海苔		海苔取り	海苔かたづけ				田の草 芽まわし		網張	乾場造り		
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月

図 12 昭和 40 年 N 氏生業暦 ※ N 氏手帳から作成

海苔については昭和28年から大きな違いはない。葎についてはなくなった。そして、4月以降には定期的に短期労働に行くようになる。

【作業日数の比較】

手帳の作業日数から生業別の作業日数を集計すると図13～15のようになる。

昭和28年は海苔42%と漁業37%で、稲13%、ハス7%で、行商1%となる。妻の作業日数がわからないので、一家の生業比率は不明であるが、海苔と漁業の比率が約8割であり、生活の中心であったことがわかる。

昭和30年になると、全体では、海苔46%、稲13%でハス15%、葎1%、アサリ行商が25%となっている。大きな変化としては、漁業がなくなって、アサリ行商が増加していることである。アサリは東京湾全体でみれば昭和29年に貝類が839万貫

生産されており、この頃から急激に生産量が増加している。手帳からだけでは、生業が変化した要因は読みとることはできない。しかし、その後昭和33年に本州製紙江戸川工場悪水放流事件が起こるように、昭和30年代になると高度経済成長に伴う公害が起こってくる。個人的な要因や環境変化、豊凶などを複合的に判断しながら、生業を選択していたのではないかと考えられる。聞き取り調査などで補完することにより具体的な生業の変化の要因を捉えることができると思われるが、今後、検討していきたい。

昭和40年には、全体では、海苔40%、稲20%でハス6%、アサリ行商5%、短期労働29%となっている。大きな変化としては、短期労働に行くようになり、アサリ行商が無くなったことである。この時期は、まだ海苔も稲もハスもできるが、農業

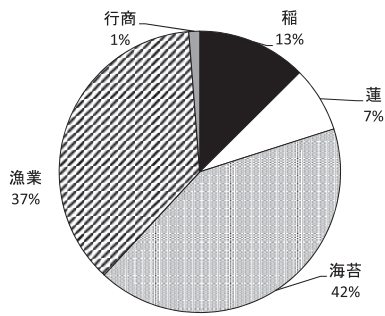


図 13 昭和 28 年 N 氏生業作業日数

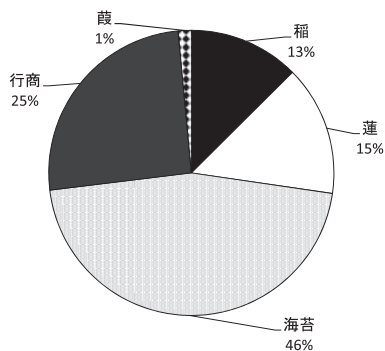


図 14 昭和 30 年 N 氏生業作業日数

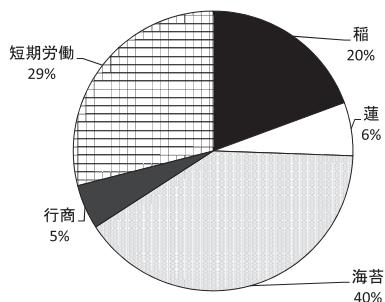


図 15 昭和 40 年 N 氏生業作業日数
※ N 氏の手帳から作成

でも漁業でもない労働形態によって、新たな局面に対応しようとしている姿がそこにはある。交通網は、地下鉄東西線が開通する昭和44年まで、バスでどこかの駅まで行くしかなかった。それでも、大きな変化がすぐそこまできている兆しが生業の移り変わりの中に投影されている。

【N氏の手帳による比較分析】

昭和28年、30年、40年の3年間のN氏の手帳による比較検討をまとめると下記ようになる。昭和28年には、海苔と漁業が約8割であり、生活

の中心であった。昭和30年には、漁業がなくなって、アサリ行商が増加している。昭和40年には、短期労働に行くようになり、アサリ行商が無くなった。

このような生業構造が変化する契機は、①漁獲量の変化などの各生業の盛衰、②技術の進歩、③個人的な要因、④公害などの環境変化、⑤社会的（行政を含む）変化などが挙げられる。浦安では、都市に隣接しているために、環境変化と社会的変化はほぼ同時に進行し、結果として農業が先にできなくなって、その数年後に漁業ができなくなる。こうした変化が、もともと農地として劣悪な条件下にある海付きの低湿地農業に致命的な影響を与えた。特に、地盤沈下や工業用水取水による塩害、悪水等の公害、交通網の発達による都市化等によって、昭和20年代末から昭和40年代にかけて起こった急激な変化が大きかったと考えられる。

今後、生業をとりまく客観的状況を明らかにした上で、こうした計量的データや手帳、日記等などを通じて、できるだけ精緻に生業暦や労働内容の変化、労働時間の変化などを捉えることが必要であろう。その上で、聞き取りと観察を行うことによって、具体的な生業の諸相が明らかになることができるよう、さらなる検討を行う必要がある。

おわりに

本稿では、海付きの低湿地での生業構造において、農地として劣悪な条件下にある農業のあり方と分業について、民俗誌的な生業の様相とN氏の個人の生業活動を通して考えてきた。

昭和になって漁獲高の低迷が続き、それに伴って海苔が導入され、同時期にハス栽培も行われるようになり、漁業（魚業、海苔）、農業（稲作、ハス）といった生業形態が形作られていく。これは、漁業だけでは生活が苦しくなる中で見いだされた方策といえる。そして、それぞれの生業の中から新たな仕事が見いだされ、細分化されながら増えていき、それぞれが繋がりを持ち、

時間的に分散させながら、それぞれの生活を成り立たせていく。

それぞれの業種が大きな規模で行うのではなく、細分化することにより均衡を保っていくことで、農地としては適していない土地での農業は成立し得たのである。

しかし、昭和20年代末から昭和40年代にかけて起こった急激な変化は、大きな生業構造の変化をもたらした。浦安では、都市に隣接しているために、環境変化と社会的変化はほぼ同時期に進行した。こうした変化が、もともと農地として劣悪な条件下にある海付きの低湿地農業に致命的な影響を与えたのである。結果として、浦安は漁業と農業をほぼ同時に手離すというダイナミックな変化を余儀なくされた。現在の浦安から昔の風景を思い浮かべることはできない。

しかし、密接なつながりの中で構築された分業とは、各人がそれぞれの職能や適性、体力等に合わせて分業を行っていた結果である。今後、高齢者社会が進む中で、労働形態が変化する傾向にある。さまざまな困難を乗り越えて格闘してきた生業の記憶を活かす機会ではないだろうか。

今後の課題としては、他地域での低湿地での都市化に対応した変化との比較により、低湿地の生業や水辺と人の関わりをさらに検討する必要があると考える。また、浦安で使われていた唐箕をはじめとする農具はコンパクトで、千葉県内の純農村部とは形態も異なるが、比較検討を行うことができなかったのが、この点も今後の課題としたい。そして、東京内湾の他地域との比較や市川、船橋との農業技術の関連性などについて考えることも課題として残っている。そうした検討により、低湿地という農業に適した環境ではないにも関わらず、さまざまな方策を駆使し、農業を営もうという意識がどのように形成されていったのかという問題についても考えてみたい。

註

- 1) 引用が記載していない資料は、聞き取り調査による。
- 2) 浦安での農業は、昭和44年に地下鉄東西線が通り、南部土地改良が完了した時にほぼ終焉を迎える。今回の聞き取り調査までに40年以上の歳月が過ぎ、話者は減少しており、その記憶は曖昧になっている部分があることは否めない。そのため、年代など文献資料で補完できない点については割愛した。また、報告に際しては生年と生地を付記した。
- 3) 「塩浜由来書」は、宝暦六年以降に成立したとされているが、解題では行徳塩業創立時からの原文書ではないが大体は信頼できそうであるとされている。
- 4) 引用は、村尾嘉陵『江戸近郊道しるべ』（東洋文庫1985、株式会社平凡社）256頁に拠った。解説によれば、本書は『嘉陵紀行』の書名で知られており、底本は内閣文庫所蔵絵入り写本で、万延元年に堅斎守興の写したものである。
- 5) 浦安市ホームページ 市街地環境情報ブックを参考とした。
- 6) 江戸近郊の下肥の活用については、堀充宏の論考が詳しい。「東京近郊農村における下肥利用の諸相」1993、『日本民俗学フィールドからの照射』井之口章次編など。
- 7) 『中近世の山野河海と資源管理』平成21年、守本昌広著、有限会社岩田書院、p.258。
- 8) 浦安のアオギス、ハマグリ、シラウオ、ウナギについては、『東京湾再生計画—よみがえれ江戸前の魚たち—』の論考が詳しい。
- 9) 『浦安町誌』上 昭和44年、編集浦安町誌編集委員会、発行浦安町役場。

参考文献

秋山笑子

- 2010 「水辺の環境と生活の変容—手賀沼のほとりで農に生きた人：増田実日記から—」地方史研究協議会編『北総地域の水辺と台地—生活空間の歴史的変容—』雄山閣。

千葉県衛生部公害課

- 1968 『葛南地域地盤沈下観測井調査報告書』昭和42年度。

「千葉県稲作誌」編集委員会

- 1986 『千葉県稲作誌』『千葉県稲作誌』編集委員会。

千葉県開発庁臨海開発局臨海計画課

- 1974 『内湾臨海部土質調査資料集』千葉県開発庁臨海開発局臨海計画課。

千葉県民俗総合調査団

- 1967 『東京湾の漁撈と人生』千葉県教育委員会。

千葉県農林水産部耕地課・農村整備課

- 2004 『千葉県の田園づくりのあゆみ 1952～2003』千葉県農林水産部耕地課・農村整備課。

千葉県史料研究財団／編集

- 1996 『千葉県の自然誌 本編 千葉県の大地』千葉県。
2006 『千葉県の歴史 資料編近現代6』千葉県。

「千葉県野菜園芸発達史」編さん会

- 1985 『千葉県野菜園芸発達史』「千葉県野菜園芸発達史」編さん会。

船橋市経済部農水産課

- 1974 『船橋漁業史』船橋市経済部農水産課。
1979 『船橋漁業生産史1』船橋市経済部農水産課。
1982 『船橋漁業生産史2』船橋市経済部農水産課。

市川市農業協同組合

- 1993 『写真集 躍進 みどりと汐風のまち』市川市農業協同組合。

市立市川歴史博物館

- 1982 『市立市川歴史博物館常設展示 中世以降の市川 展示解説』市立市川歴史博物館。

市川市史編纂委員会

- 1972 『市川市史 第6巻上』。

今村奈良臣・佐藤俊朗他

- 1977 『土地改良百年史』平凡社。

今里悟之

- 2004 「定置網漁村における複合生業形態の計量分析—昭和初期の丹後半島新井集落を事例として」『日本民俗学』240。
2007 「民俗学に「数字」は有害か？」『日本民俗学』272。
2010 「実践の民俗学の傍らで」『日本民俗学』261。

川名 興

- 1988 『日本貝類方言集—民俗・分布・由来—』株式会社未来社。

木下達文

- 2000 『江戸前の海民—芝・金杉浦の記憶—』

港区教育委員会。

小島孝夫

- 2001 「複合生業論を超えて」『日本民俗学』227。

小松正之・尾上一明・望月賢二

- 2010 『東京湾再生計画—よみがえれ江戸前の魚たち—』株式会社雄山閣。

小室正紀編著

- 1992 『地図に刻まれた歴史と景観2—明治・大正・昭和—市川市・浦安市』新人物往来社。

栗原東洋

- 1950 『千葉県政物語』憲政評論社。

三谷紀美

- 1995 『浦安・海に抱かれた町』筑摩書房。

宮崎長蔵

- 1976 『行徳製塩と新井村の足跡』宮崎長蔵。

村尾嘉陵

- 1985 『江戸近郊道しるべ』平凡社。

盛本昌広

- 2009 『中近世の山野河海と資源管理』有限会社岩田書院。

永島政彦

- 1996 「農業日記にみる畑作農家の生業」『群馬歴史民俗』17。

内務省東京土木出張所

- 1935 『江戸川水利統制』内務省東京土木出張所。

西脇いね

- 1992 『句集鳥雲』。
1999 『今日もいいあんべえ』。
2013 『浦安のかあちゃん農家』。

西脇保幸

- 1975 「人口増加による土地利用の変化—浦安町地域産業関連表を用いて」『地理学評論』48 (1)。

- 1991 「浦安市の変容からみた首都圏」『首都圏の空間構造』二宮書店。

- 未刊行 「都市化による土地利用の変化」。

野本寛一

- 1987 『生態民俗学序説』白水社。
1994 『共生のフォークロア : 民俗の環境思想』青土社。
1995 『海岸環境民俗論』白水社。
1997 『生業の民俗』雄山閣。
1999 『四万十川民俗誌: 人と自然と』雄山閣。

農山漁村文化協会／編集

- 1989 『野菜園芸大百科13 ジャガイモ・サツ

- マイモ・サトイモ・ナガイモ・レンコン』農山漁村文化協会。
- 小倉 章
1984 『戦後における房総の農業と農政』（小倉章氏記念出版編集委員会編集）うらべ書房。
- 大豆生田稔
2007 『お米と食の近代史』吉川弘文館。
- 織本 泰
1911 『富津漁業史』富津文庫編集所。
- 大田区立郷土博物館
1889 『写真が語る東京湾 消えた干潟とその漁業』太田区立郷土博物館。
- 沢田英司
2010 『レンコン 栽培から加工・販売まで』農山漁村文化協会。
- 篠原 徹
1990 『自然と民俗 心意のなかの動植物』日本エディタースクール出版部。
1995 『海と山の民俗自然誌』吉川弘文館。
2002 『自然とつきあう』小峰書房。
2005 『自然を生きる技術：暮らしの民俗自然誌』。吉川弘文館。
- 白井常之
1900 「京葉臨海地域における地盤沈下の現況とその原因」『地理』11（9）。
- 菅 豊
1997 「川・沼・池の民俗」『講座日本の民俗学 4環境の民俗』雄山閣。
2001 「自然をめぐる民俗研究の三つの潮流」『日本民俗学』227。
- 高橋美貴
2001 「近代前期における水産資源の『保護繁殖』政策—漁業史における年代—」『国立歴史民俗博物館研究報告』87、国立歴史民俗博物館。
2007 『「資源繁殖の時代」と日本の漁業』株式会社山川出版社。
- 東京都内湾漁業興亡史編集委員会
1971 『東京都内湾漁業興亡史』東京都内湾漁業興亡史刊行会。
- 卯田宗平
2003 「『両テンビン』 世帯の人びと—とりまく資源に関連する複合性への志向—」『国立歴史民俗博物館研究報告』105、国立歴史民俗博物館。
- 浦安町誌編集委員会
1969 『浦安町誌』上、浦安町役場。
- 浦安町誌編集委員会
1974 『浦安町誌』下、浦安町役場。
- 浦安市企画財政部自治振興課
1981 『'81浦安市市勢要覧』浦安市。
- 浦安町企画室
1973 『浦安町総合開発計画書』浦安町。
- 浦安市教育委員会
1993 『浦安市文化財調査報告 第5集 浦安のペカ舟—浦安市ペカ舟調査報告書—』浦安市教育委員会。
1995 『浦安市文化財調査報告 第5集 海とともに—浦安市漁撈習俗調査報告書—』浦安市教育委員会。
1996 『浦安市文化財調査報告 第8集 災害と闘ってきたまち—浦安市災害史調査報告書—』浦安市教育委員会。
1996 『浦安市文化財調査報告 第9集 水に囲まれたまち—浦安市交通史調査報告書—』浦安市教育委員会。
2003 『浦安市文化財調査報告 第17集 浦安の漁撈習俗2 海苔』浦安市教育委員会。
- 浦安市史編さん委員会
1985 『浦安市史』浦安市。
1999 『浦安市史〔まちづくり編〕』浦安市。
- 浦安町役場
1950 『昭和24年版 浦安町勢要覧』。
- 浦安町役場総務課統計係
1958 『浦安町勢要覧（昭和32年版）』浦安町役場。
- 山本志乃
2010 「市稼ぎの生活誌—農家日記にみる定期市出店者の生活戦略」『日本民俗学』264。
- 山下裕作
2006 「野にある経済」『日本民俗学』247。
- 安室 知
1998 『水田をめぐる民俗学的研究—日本稲作の展開と構造』慶友社。
2003 「稼ぎ」『暮らしの中の民俗2〈一年〉』吉川弘文館。
2005 『水田漁撈の研究—稲作と漁撈の複合生業論』慶友社。
2012 『日本民俗生業論』慶友社。
- 湯浅治久
1995 「東京低地と江戸湾交通」『東京低地の中世を考える』名著出版。
- 浦安市教育委員会教育課
1982 『浦安のこぼれ』浦安市教育委員会。

Changes in Forms of Occupation and Division of Labor in a Seaside Lowland:

The Sea and the Land in Urayasu

AKIYAMA Emiko

Natural History Museum and Institute, Chiba
Chief Senior Scientist

The purpose of this article is to consider the historical and folkloric significance of agriculture in a swampy lowland beside the sea.

I consider the division of labor among local residents of Urayasu and describe occupations that were devised to sustain their lives as they kept up with progress of farming techniques and coped with environmental change on land that is inferior as farmland. I consider these matters diachronically, up to the point at which the occupations become locally extinct. I have conducted this inquiry by examination of quantitative evidence in documents and by oral interviewing.

Approximately three-fourths of Urayasu City, Chiba Prefecture, the site of this investigation, is land reclaimed from the sea. Filled in after the late 1960s, it was once a very large tideland and a place that was most suitable for fishery and laver culture. The primary occupation of residents was fishing, but there was also agriculture. From the last years of the Meiji era, new techniques of laver culture and shellfish culture flourished in Urayasu to offset the decrease in the catch of fish. In the agricultural sector, the new technical introduction of lotus cultivation brought a measurable increase in cash income. Thus for the generation active in the labor force in the Showa thirties (1955–1965), labor in Urayasu was divided among the occupations of rice growing, lotus cultivation, fishing, shellfish culture, and laver culture. I have analyzed the entries for 1953, 1955, and 1965, in the notebooks kept by Mr. N., a resident of Urayasu City. They reflect that the occupational structure of the area changed in the thirties through the forties of the Showa era (1960s–1970s). The factors that caused changes in occupational structure include: ① ups and downs of different occupations, ② technological change, ③ personal factors, ④ environmental change, and ⑤ social change. This article, by utilizing quantitative data, casts light on the forms of occupation of people engaged primarily in agriculture on land reclaimed from the sea, a subject that has not previously attracted very much attention.

Key words: meadow belonging to the sea, agriculture, fishery, division of labor, inferior farmland, quantitative data, Urayasu City, Chiba